

君をのみおもひやりつ、神よりも心のそらになりしよひかな

〔枕草子^八〕名おそろしき物 いかづちは名のみならずいみじうおそろし

〔枕草子^十〕せめておそろしき物 よるなる神

〔日本書紀^{神代}〕一書曰伊弉諾尊拔劔斬軻遇突智爲三段、其一段是爲雷神、

○按ズルニ、雷神ノ事ハ神祇部神祇總載篇ニ詳ナリ、

〔政事要略^{二十六年}〕寛平御遺誠云、○中 雷公祭、年來有驗、不闕之、

〔延喜式^{四時祭}〕二月祭 鳴雷神祭一座十一月准此、坐大和國添上郡、

三月祭 霹靂神祭略○下

〔三養雜記^四〕雷公連鼓を負の圖 雷公を畫けるに、連鼓をおふのかたを圖すること、王充論衡に

見えたるは、世人のゑるところなり、玄かるに觀世音菩薩の眷屬に風伯雷公あり、金剛阿吒婆俱

經に、雷の連鼓を負へること見えたり、圖像抄などにも亦連鼓をおふ圖あり、おもふに論衡に俗

説といへるは、もと佛説に出たりといふことを玄らざるか、さて連鼓を負へる圖は、法華經の普

門品に雲雷鼓掣電の文によりて、その聲の響を形容したるにやとおもはる、は、いかゞあるべ

き、佛家には猶ふかき意もあるべくや、再おもふに、撫古遺文の古篆に雷字を^ニかくの如くに作

るは、何となく連鼓のかたちによしありとおもはる、その窮理説には、氣海觀瀾に、夫雷鳴即越^エ列

吉的爾^{キタル}之迸炸、而與礮聲同、其音與雲反響、斯聞殷々云もの、理に於て間然なし、因云、佩文齋詠物詩

選に、山上に雷を聞の詩あり、宋蘇軾云、唐道人言、天目山上俯視雷、而每大雷電、但聞雲中如嬰兒聲、

また願豐堂漫書に、夏日晦菴與客登、願見山下、白霧彌漫若大海、然而山頂赤日了無纖翳、俯視突烟

暴起、或丈餘、遞至尺許、亦無所聞、頗異之、從者以爲雨作也、及下山、村麓人云、適有驟雨、挾震雷數百已

雷神